

[授業報告]

大人数講義に挑む ― いくつかの試み ―

文学部英語文化学科教授 中村 啓佑
knakamra@res.otemon.ne.jp

はじめに

昨年「語学の授業から講義へ」でも紹介したように、筆者はもともとフランス語の教員であり、毎年講義を担当するようになったのは、ここ10年のことである。語学クラスでは受講者が40名を超えることはほとんどないし、またこれまで担当してきた講義では受講登録者200名を超えることはなかった。率直に言って、本学においては、非常に恵まれた環境で教育にあたっていたと言える。

ところが今年度になって、まったく予期せぬ事態に遭遇した。今年度から開講した「異文化交流の歴史」(秋期)を担当することになったのであるが、これが約780名という登録者数となったのである。教務にお願いしてクラスを二つに割っていただき、新しくできたクラスを急遽安川教授にもっていただくことになった。快く担当増を引き受けてくださった安川氏にこの場を借りて、お礼申し上げたい。

それでも、筆者が担当した異文化交流の歴史A(経済学部・経営学部)の登録者数は470名となった。大人数講義がいかに難しく、不愉快なものであり、疲労をとまうかは、これまで経験された多くの方々から聞いていたので、不安は大きかった。もちろん、出席者数は登録者数を下回るであろうが、それでも300名から350名は予測される。この事態に対処するためどのような方策をたてたか、また、それはどの程度成功し、どのような点でうまく行かなかったのかを詳述することが、本報告の目的である。

1 授業準備

(1) 講義要項

とうぜんのことながら、講義要項を書く時点では、来るべき講義が登録数470名を上回るなどとはつゆ知らず、前年度の「日本と異文化」と同じように考え、同様の心構えで授業に臨もうとしていた。要項は以下のとおりである。

まったく新しい授業を始めることには、創造する喜びと新しい出会いへの期待がある。自分の講義内容が次第に形を整えるとき、そして、どんな学生たちと、どんな授業が展開されるのかを考えると、胸はずむ思いがある。その一方で、不安もまた大きい。このテーマを語るだけの力量が自分にあるのか、はたして、学生たちは、こちらの意図を理解して積極的に参加してくれるのだろうか、などなど。しかし、授業は教師にとっても学生にとっても挑戦であり、冒険である。誰よりも教える者自身が大きく成長したいと願う。そんな意気込みをもたないで、そしてそれに見合うだけの精力的な準備なくして、どうして学生を惹き付ける授業ができるであろうか！以下知的冒険の内容である。

はじめに 文化ってなーに、異文化ってなーに

1. 異文化衝突から異文化交流へ
2. 海を渡るということ ー鑑真と空海
3. 茶、タバコ、コーヒーの来た道
4. 和語・漢語・外来語
5. 漂流した人々 大黒屋光太夫とジョン・万次郎
6. 幕末の往来 ペリーと吉田松陰 (?), 福沢諭吉
7. 留学生と外国人教師 津田梅子とラフカディオ・ハーン

おわりに 国際化ってなーに

一緒に考えよう！

以上のような広範囲の時代、広範囲の分野について考えをめぐらすことは、確かに大胆な冒険である。しかし、この授業の目的は、歴史的知識を与えることでもなければ、宗教や思想について考えを深めることでもなく、次のような問題を一緒に考えてゆくことにある。

- * 文化って何だろう？異文化って何だろう。 * 多様性って何だろう？
- * 純粋な文化、純粋な民族というものがあるのだろうか？ * 異文化を取り入れることによって、私たちは何を失ったのだろうか？ * 留学って何だろう？ * 国際化って何だろう？

参加してこそ授業の意味があるー 授業の進め方と希望

授業は作業である。心身を働かさないと授業を受けることはできない。その都度提出する問題について、自分の考えを述べ、資料を進んで読み、自分から積極的に疑問を提出してほしい。授業中、どれだけ質問をするかも評価の対象になる。

授業に対する参加の度合とレポートの内容を総合して評価する

- 1) 毎回、前回の授業について設問を提出し、どの程度理解しているか判断する
- 2) 講義中、担当者的出す質問に、口頭で答えたり、ペーパーで答えたりする者を厚く評価

する

3) レポート

期末レポートを提出

以上を総合評価する

(2) プレゼンテーションの方法を変える — パワーポイント

2002年の春休み中に、パワーポイントによる教材作成とプレゼンテーションがほぼできるようになっていたので、2003年度からは、授業でこれを使おうと考えた。その大きな理由の一つは、もともと板書が苦手であり、学生の授業アンケートでいつもこの点の指摘がいちばん多いからである。きれいに書くことに時間や神経を使うよりも見やすい形で要点を提示したほうがいいし、その分説明に時間を使えろと考えたからである。さらに、もう一つは、講義内容から考えて、地図、肖像、図像、写真などを多用した方が学生の興味を引く上に、わかりやすいと考えた。

2 準備の変更と新しい対策

しかしながら、春学期が始まり登録者数がわかるに及んで愕然とし、まだ見ぬ階段教室での騒然たる授業風景を想像して不安はますます大きくなっていった。だからといって、これまでやってきた授業スタイルをまったく放棄する気にはなれなかった。そんなことをすれば、「わかりやすい授業」「常に問いかける授業」「質問を大切にす授業」という三つのモットーは少人数クラスにしか通用しないのかということになってしまう。恵まれた条件下でしか通用しない、いわば「温室の方法」になってしまう。多分、これまでの講義と同じ効果をあげるわけにはゆかないであろうが、しかし、どこまで三つの方針を貫くことができるのか、これはやりがいのある兆戦ではないかと密かに考えた。

と同時に、出席者300名以上のクラスにおいて従来の授業スタイルを貫こうとすれば、それなりの対策、それなりの工夫が必要であることはいうまでもない。そこで考えたのが、どうすれば混乱が生じないか、どうすれば整然と聞いてもらえるかということであった。

(1) 授業の組み立てを若干変更する

昨年本紀要に書いたように、従来の筆者の授業の組み立ては以下のようなものであった。

① 前回の授業に関する設問

前回の授業を学生がどの程度理解しているかを見るために質問をする。前回の授業のポイントを尋ねる場合もあれば、前回使用した資料の中で重要な一節について質問する場合もある。学生は用紙（出席表を兼ねる）に数行で回答し、私の説明をもとにA, B, C, Dの4段階で自己採点し、授業の終わりに提出する。毎回の点数を学年末には総計して評価の対象とす

る。

② 前回の授業の質問に対する答

毎回の授業の最後に、その日の授業内容についての質問あるいは印象を書かせることにしている。前回出てきた質問に対して答える時間である。

③ 講義 (本論)

いわゆる私の説明の部分である

④ その日の授業に対する質問や印象

学生がその日の授業でわからなかったこと、もっと知りたいこと、感じたことなどを書いて提出し、授業が終了する。

大枠としてこの組み立てを守ってゆきたいが、②と④については変更せざるをえなかった。というのは、これまでの授業で毎回相当数の質問が出たことから考えると、300名を超える出席者数では、とてもすべての質問に対応しきれないからである。そこで、ほんとうに質問をしたい学生は、授業中に、あるいは授業後に質問すると考え、パワーポイントの内容をプリントしたペーパーに、毎回大学のメール・アドレスを明示し、ここに質問を寄せてもらうことにした。なるほど質問数は大幅に減ったが、その分、面白い、授業内容の核心をつくような質問がメールで来ることになり、私の説明の不十分なところ、学生が誤解しやすいところがよくわかった。

(2) アシスタントの募集と役割

授業を混乱させないためには、私自身が混乱しないこと、すなわち授業によどみのない流れを作ることが必要である。すなわち、あれやこれやの仕事に振り回されるのではなく、常に学生に対峙して、秩序とリズムのある行動をとらなければならない。そのためにはとても300人以上の学生を相手にし、資料の配布から「前回の授業に関する設問」の答えを書いたペーパーの回収まで、すべてを私一人で行うことはできない。

そう考えて、最初の授業の際に学生の中からアシスタントを募集することにした。その際説明したアシスタントの役割は、①会場整理、②プリントの配布、③宿題の回収、④プリントの運搬 (研究室から教室までの) である。

幸いにして、5人の学生が引き受けてくれ、また、後日、もう2人の学生が参加してくれた。「会場整理」とは、特に最初の数回、席をあけないで前の方に座ってくれるよう指示することである。注意しないと前列の座席があき、結果として遅れて来る学生が授業中に通路を通ったり、ひどい場合は通路に座ってしゃべりだす結果となるからである。私語や騒がしい学生に対する注意などについてもアシスタントの協力が得られればと最初は考えていたが、これは無理なことであった。

資料の配布も、置いてとってもらう形だと散乱したり、列を作らないで混乱をおこしやすい。各列に配置したアシスタントのもとへ取りに行くことで、整然とした配布が保障される。また前回の回答ペーパーを返却しているの、ある一定時間で引き上げないと、いつまでも返却ペーパーの周りが混乱する。これを引き上げるのも、彼ら彼女らの仕事である。

募集に際しては、全学生に次のように説明した。アシスタントに成績上の特典はまったくない。有利な点があるとすれば、教員と話す機会が多いので、レポートの書き方や勉強の仕方について指導してもらいやすいことである。決まった謝礼は出さないが、折にふれてご馳走する、というものであった。

3 結果

アシスタントの働きのお陰で、機器の準備と講義に専念することができた。最初にも述べたようにパワーポイントを使って授業を行ったが、これは大人数講義でも大いに力を発揮することがよくわかった。2404 教室の大スクリーン有効であるが、ただ、自前の、あるいは総合情報センターが用意してくれるノートパソコンを毎回持参せねばならないのが難点である。

パワーポイントについては、いずれ、これをテーマとした授業報告を書きたいと考えているが、とりあえず利点を挙げておくと、次のようなことになるうか。

- ① 内容をまとめやすい（その分、まとめる努力はいるが、すでに授業ノートができている場合は、もっと楽である）
- ② 学生の頭に残りやすい 映像+映像内容そのままのプリント+口頭説明
学生は内容を三重に受け取ることになる。
- ③ スキャナーを使って資料映像をとりこめる
- ④ 図解できる
- ⑤ 説明用ノートを各スライドごとに併用できる。

アシスタントの存在は非常に心強い。上記のような働きをしてくれるばかりか、授業の印象や問題点を伝えてくれるし、教室運営について助言してくれることもあるからである。このようなアシスタントの配置を大学が制度として保障してくれれば、緻密な授業運営が可能となろう。

「わかりやすい授業」「常に問いかける授業」「質問を大切にす授業」は可能であったのかと問われるならば、然りまた否と答えざるをえない。学生に対する折に触れての質問はできたが、反応は中規模人数の講義にくらべて小さく、また答える学生が限られていた。メールで受けた質問には個別的に答えたり、必要と思われるものは教室で全体に向けて答えたが、質問の数も中規模人数の講義に比べて少なかった。これまでのように学生参加型の授業を目指したが、限界を感じたことは事実である。

私語による騒がしさは、最後までやむことはなかった。注意すれば静かになるが、しばらくす

と気になってくる。授業中何度も制止していただち、疲れを感じたこと、怒りを露わにしたこともあった。これまで、自分の話術は聞く者を十分ひきつけるという自信をもっていたが、それが幻想にすぎないことがよくわかった。新しい経験に挑戦することは、新しい可能性を見出すことでもあるが、また、己の限界を知ることでもある。

大人数講義は前世紀の遺物である。何よりも人間的な規模のクラスを多く作ることが望まれる。

最後に、半年間教室運営を助けてくれた7人のアシスタント、石津なぎ子、市川英里、今北枝理、下西豪己、田中久美子、西上俊美、山本勇の皆さんに感謝の意を表したい。